慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	緒方富雄著 緒方洪庵伝
Sub Title	Tomio Ogata, "The life of Koan Ogata"
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1978
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.71, No.3 (1978. 6) ,p.429(127)- 431(129)
JaLC DOI	10.14991/001.19780601-0127
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19780601-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

緒方富雄著

『緒方洪庵伝』

幕藩体制下の日本をヨーロッパに結びつけ，西欧文明の香気を，鎖国政策に苦悩する知識人を媒介として日本にもたらしたものはオランダ人であり，蘭学であった。幕末の知識人にとって，西欧文明とは，後に英学によって代られたとはいえ蘭学であり，蘭学はたんにオランダ語というのではなく，オランダ語を通じてのヨーロッパの認識そのものにほかならなかった。

本書の著者緒方富雄氏は洪庵の曾孫にあたり，「その意味では洪庵のヒマゴの書いた答案ともいえよう」とのべられているように，きわめてユニークな洪庵の伝記である。周知のように緒方洪庵は，わが国における蘭学研究の先駆者であり，彼が大阪において経営した適々斎塾あるいは適塾は，その門下生から幾多の俊秀を輩出し，幕末維新の事業に大きな貢献を成しとげたのである。たとえば，村田蔵六〔後の大村益次郎〕，佐野常民，菊池秋坪（箕作秋坪），橋本左内，大鳥圭介，長野専斎，福沢諭吉など，今日ひろくその名前の知られている人々である。緒方の塾に出入した人々については，その名簿が，本書のなかにつけ加えられているが，これをみれば，緒方洪庵の蘭学を通じての，当時の心ある青年たちにたいする影響がいかに大きかったかが想像できるであろう。

本書は，つぎの諸章から成っている，

第一章　緒方洪庵の生涯
第二章　蘭学者としての洪庵
第三章　医学者としての洪庵
第四章　教育者としての洪庵
第五章　人としての洪庵
第六章　むすび
　　緒方洪庵年譜
　　附録および追補

となっている。

本書は600ページを超える大冊であるが，彼の伝記の部分は，最初の150ページほどで，大変読み易い文章をもって綴られている。

第一章は，文化7年（1810）に生まれ，文久3年（1863）に54歳で死んだ緒方洪庵の生涯を簡単にスケッチしたものである。彼の生涯を決定する最初の時期がはじまったのは，文政8年2月5日（1825），16歳で元服して，田上駅之助惟彰と名のった時期で，「大阪に足守藩蔵屋敷ができたにつけて，父惟因はその留守居役を命ぜられた」ことが，彼をして蘭学を習得させる機縁となったのであって，のちに洪庵から蘭学を学んだ福沢の蘭学研究の端緒ときわめて類似していて興味深い。

大阪で中天游にオランダ語を学び，天游のすすめで，文政13年4月（1830），21歳のとき，ひとりで江戸へ行き，そこで坪井信道の門に入った（6～9頁）。「信道はことのほか洪庵に目をかけてよく指導し，洪庵もよく勉強したので，学力も大いにすすみ，やがて塾頭にまでなった。洪庵は，自序に，このころ原書を数十巻読んだ結果，どうやら顔にかかった膜がとれて，かゆいところへ爪がとどくような気がするようになったとのべている」（9頁）。学力が進み，信道に紹介されて宇田川榛斎の門に入った。

この宇田川榛斎との出会いが，洪庵に決定的な影響をあたえた。というのは，「榛斎が死ぬまぎわに洪庵にたのんだ病理学書の編述の仕事は，いわば一生を支配した」からである（10頁）。江戸遊学中に，洪庵は，坪井信道，宇田川榛斎のほかに，宇田川榛斎の門人箕作阮甫にも評価され，蘭学者としての地歩を築いたのであった。

天保7年2月10日（1836），27歳のとき，いままでの緒方判平を緒方洪庵とあらため，長崎に留学したが，長崎には当時，佐藤泰然，青木周弼など，後に有名になった蘭学者たちがいたことは知られているが，洪庵が誰について蘭学を学んだかは明らかではないといわれる（13頁）。洪庵の蘭学者としての本格的な活動は，「天保9年（1838）から文久2年（1862）までの24年間にわたり，蘭学者としては，本を著わしたり，翻訳をしたり，医者としては，病む人をなおす仕事のほかに，今日の予防医学，公衆衛生の仕事，ことに種痘事業に一方ならぬ力をつくし，また教育者としては，多くの子弟の蘭学・医学の教育と人間形成に没頭して，明治維新の前後からずっとあとまで，国のために本当に役に立つ人物を多く出した」（15頁）。

この時期が，洪庵にとってまことに黄金時代であり，得意の絶頂にあったと思われるが，やがて転機がおとずれる。「江戸の蘭学者のなかでも特に政治力のあった伊東玄朴等が中心になって，洪庵を江戸によんで幕府の奥医師（将軍の侍医）にしようという動きがたかま

り，権力の圧力におされて，『医学のため，子孫のため，討死の覚悟』でこれをうけなければならなくなった。そして将軍侍医とされ，文久2年12月（1862），幕府直轄の西洋医学所の頭取に，大槻俊斎についで任ぜられるが，文久3年6月10日（1863），心身ともに疲れ，死亡した。

つぎに，洪庵の学問的業績および社会的活動であるが，彼はまず，蘭学研究の必要上，蘭書の翻訳あるいは編述の仕事にたずさわった。これは当時，一般に蘭学者の研究の常道であって，洪庵の場合，天保3年12月（1832）に訳し終った『人身窮理学小解』がある。「これは，ドイツのローゼ（T. A. G. Roose）が，ドイツ語で書いた人体生理学書を，エイプマ（M. S. Ypma）が，オランダ語に訳して，Handboek der Natuurkunde van den Mensch と名づけて，1809年に出版したものを，洪庵が訳したものである。著者は，この訳書が一般にひろく読まれ，今日でも多くの写本がのこっているところから，その翻訳が卓抜であったことを指摘している。ただこの同じ年，すなわち1832年，未完成に終ったとはいえ，高野長英が訳編した『医原枢要』が出ていることが印象的である。

つぎに，天保5年（1834），洪庵が信道の門に入って4年目，25歳のとき，医薬品術語集ともいうべきオランダ語・ラテン語の術語を集めて，一種の辞書をつくり，これに日本語の訳語をつけたものである。標題は，オランダ語でつぎのように書かれている。Verzameling van de Kunstwoorden, betrekkelijk de Genecsmiddeln : door M. S. Kenzoo : en daarna verbeterd en zeer vermeerderd ; zelfs alphabetisch gerangschikt door O. G. Sanpij. Je Edo, Tenpoo 5.

ところが，この天保5年（1834）12月4日に宇田川榛斎が66歳で亡くなり，洪庵には，「榛斎の大著『遠西医方名物考』の補遺編のなかへ，度量衡の算定（換算）を加えること」，「もう一つは，榛斎がかねて計画していた，今日でいう病理学の本をつくりあげること」が課せられた。この頃，洪庵は，『視力乏弱病論』，『医学入門物理約説』，『視学弁堂』，『和蘭詞解略説』などの啓蒙的な書物や教科書を邦訳しているが，彼が27歳になった天保7年（1836），大阪から長崎へ修業に出たときから洪庵と名のった。長崎時代の訳書として，「袖珍内外方叢」があるが，これは青木周弼，伊東南洋の3人による共訳で，謨烏普刺剔著の処方を訳したもので，広く普及したものであるという（35～36頁）。

天保9年3月23日（1838），瓦町で蘭学塾を開き，修業時代を終り，文字通り彼の黄金時代に入ったわけである。この時期の洪庵の著作の主要なものは，『病学通論』，『扶氏経験遺訓』および『虎狼痢治準』の三篇であった。とりわけ重要なのは『病学通論』で，わが国最初の病理学の書物で一般に広く蘭学者の間に用いられた。また『扶氏経験遺訓』は，「当時ドイツの内科学の第一流の大家であり，ベルリン大学の教授であったフーフェランド（C. W. Hufeland）が，自分の50年の経験にもとづいて，系統立った教科書風にまとめたもので，それをオランダのハーヘマン（H. H. Hageman, Jr.）が，1838年にオランダ語に訳したものであった。「洪庵はこの本をくりかえし読んで大いに感激し，ついにその翻訳をおもいたった」（43頁）といわれるが，これをみても，若い頃の翻訳が，学問の研究にとって重要であるかがわかるのである。また第三の『虎狼痢治準』は，安政5年8月（1858）の刊行で，コレラの大流行の際に，その治療法について，ある書物から翻訳したものであるという。

以上は，学者としての洪庵の業績であるが，第三章は，「医者としての洪庵」の事業の偉大さを，主として種痘による天然痘の予防および虎狼痢の治療のための奮闘したことをのべているという。洪庵は，手紙の終りによく，『道のため，人の為め』と書いたといわれるが，医者としての崇高な使命感は，まさにそうした仁術の実践であったと思われる。だが，われわれにとってもっとも印象的なのは，教育者としての洪庵の姿であろう。これについて，著者緒方富雄氏は，つぎのように書いている。「洪庵は，天保9年（1838）の3月のおわりに大阪の瓦町に家をかまえて，医学者として活動をはじめたが，これと同時に蘭学塾を開いて，教育者としての活動もはじめた。すなわち，大阪・江戸・長崎と，約14年間の蘭学医学の修業をおわった洪庵は，ここにいよいよ独立の蘭学者・医学者，そして教育者としての生活にはいったのである」（80頁）。

天保14年12月15日に，洪庵は過書町（井池東へ入）に引越したが，それは間口約6間，奥行約22間，約140坪であったという。この適塾での生活については，すでに福沢諭吉がその『福翁自伝』のなかでくわしくふれ，また本書の付録としては掲げられているので，深く立ち入る必要はない。

本書はすぐれた伝記であるが，人間洪庵の悲劇性の追求という点では必ずしも充分ではない。大阪の自由人，蘭学者洪庵は，幕府の権力によって，侍医とされ

たため，経済上の負担が加わったばかりでなく，自由を失わなければならなかった。蘭学は，西ヨーロッパの合理的な思想を学びとる強力な武器であり，それは直ちに反権力，すなわち封建制の否定を導びくためのものでもあった。渡辺華山や高野長英の歩んだ道はそれであり，そのゆえに彼らもまたその合理思想のゆえに権力の圧迫をうけ，悲劇的な生涯を辿らねばならなかった。

洪庵は，ヒューマニストであり，すぐれた徳行の持主ではあったが，そのゆえにまた封建的な圧制の社会の因習にまき込まれて，その自由を失い，悲劇の人となったのではなかろうか。(1977年，岩波書店，B6判637頁，2,200円)

飯田　鼎
(経済学部教授)

御園喜博著

『農産物価格形成論
——農産物市場と価格形成——』

(1)

本書は，著者がすでに昭和41年に公けにされた「農産物市場論」(東京大学出版会)の「姉妹篇」として，本格的に農産物価格形成論を展開した労作である。前著との関連で，本書が継続して基本的なねらいとしていることは，「市場構造との関連で価格形成の具体的なありかたを明らかにすること，逆にいえば農産物価格論(価格形成論)を有機的にくみこんで農産物市場論(市場構造論)をより厳密なものに体系化すること——いいかえれば市場論(商業学的解析)と価格論(経済学的分析)との統一的把握——」(はしがきi)を追究することにある。その構成を章別に示せば，次のとおりである。

序　章　問題の所在と課題
——市場論との関連でみた
農産物価格論の課題——
第1章　農産物価格形成の理論
——農産物市場と価格形成——
第2章　農産物価格形成の展開
——市場構造展開との関連でみた——
第3章　農産物価格形成の構造
——国家独占資本主義下の諸形態——
終　章　農産物価格政策と政策価格

(2)

まず，著者の強調される点を中心に全体の内容を紹介することにしよう。

序章では，本書の問題意識ならびに課題が明らかにされる。著者は，従来の農産物価格論が大別してマルクス経済学の立場からする農産物価格形成の基礎理論，および近代経済学の立場からする市場における需給論としての価格論に分けられるとしながら，そのいずれもが「ともに抽象的な原理の世界な問題とし対象としている」(3頁)点では共通していることに着目し，農産物価格の理論的実証的解明のためにはそれだけでは不十分であり「それを前提としたより具体的な理論と分析」すなわち「市場関係を導入した農産物価格論」(同上)が必要であることを強調される。そして著者はこのような問題意識から，J.S.ベインら近代経済学的立場からの「市場構造」論的接近，ならびに資本主義発展段階との関連で農産物価格論を具体的に展開された石渡貞雄氏の見解(「農産物価格論」東大出版会　昭和33年)，さらにいわゆる宇野理論的手法にも注意を促したうえで，自ら課題とする問題領域が「農産物市場ないし広義の農産物市場構造と，そこでの流通・市場機構との関連でみた価格形成の態様を理論的実証的に明らかにすることであり，ことにそれを資本主義発展との関連で歴史的具体的に(つまり段階論的ならびに現状分析的に)分析解明すること」(5頁)にあるとしている。

第1章では，序章で明らかにされた問題意識を受け第2章以降の分析の理論的基礎が与えられる。それは要するに農産物価格形成をめぐる諸要因の理論的解明といってよいが，具体的には競争構造・市場構造，流通機構・市場組織，流通過程諸段階，市場圏，市場体系，需給変動といった諸要因について，それらがどのように価格形成を規定するかを明らかにしているのである。

第2章は，「資本の農業・農産物市場掌握の展開に照応して市場構造(市場編成)の展開がどのように進み，それに応じて価格形成の構造がいかに発展展開するかを明らかにすること」(39頁)を基本視角として「市場構造との関連でみた農産物価格形成の態様を，わが国